特集 前橋プラザ元気21を核としたまちづくり

前橋市　産業経済部　にぎわい商業課

■ はじめに

本市の公共事業として、民間施設を活用した初めての大型コンバージョン事業となった「前橋プラザ元気21」（以下、元気21）は、平成29年12月をもって開館から10年を迎えます。

10年の節目の年を迎えるにあたり、本稿ではこの施設が本市の中心市街地において、これまで果たしてきた機能・役割等を振り返るとともに、現状抱える課題等を念頭に、今後のあるべき姿を考えることとします。

■ 前橋プラザ元気21について

開館までの経緯

平成16年1月、LIVIN前橋店が閉店。当時、中心市街地から大型商業施設が撤退した影響は甚大で、商店街通行量調査（LIVIN隣接の調査地点）によれば、平成14年調査の2,674人／日に対し、閉店後の平成16年調査では399人／日と大幅減となりました。

市民や有識者等の意見を反映させた旧LIVIN活用計画（H17年度策定）では、商業店舗としてのリニューアルではなく、大学誘致や中央公民館などの地域交流機能の充実、子育て支援施設の導入、生鮮食料品スーパーの誘致といった「多くの市民が集い、利用できる、新たな生活空間を備える複合施設」を整備目標に掲げました。

その後、上記計画をもとに、国のまちづくり交付金（当時）を活用し、平成19年12月のリニューアルオープンに至りました。LIVIN前橋店閉店から数えて3年11ヶ月。大型公共事業としては、異例の早さで事業推進できたのは、中心市街地の表玄関と言える場所に、一日も早く活気を取り戻したいとする関係者の熱意であったと言われています。

国道50号線沿いに立つ「前橋プラザ元気21」

施設概要と主な利用者

旧LIVIN活用計画の目標像のとおり、「多くの市民が集い、利用できる、新たな生活空間を備える複合施設」として整備された元気21では、1階は市民交流、2階はこども交流、3～5階は地域交流をテーマにしたフロア構成になっています。また、地下1～2階及び6～7階には、地元スーパーと医療福祉系大学がテナント入居しています。

フロアごとの主な利用者については、中学生・高校生から子育て世代、中高年層に至るまで、幅広い世代を対象としています。開館して10年、地域社会に定着してきましたが、市民の皆さんは、例えば、このような過ごし方をしています。

A彦さん（70代男性）の過ごし方

- **午前**　5F中央公民館で書道サークルに参加
- **お昼**　サークル仲間とまちなかの蕎麦屋へ
- **午後**　3Fホワイエで絵手紙の展覧会を鑑賞

B美さん（30代女性）の過ごし方

- **午前**　友人親子と2Fプレイルームを利用
- **お昼**　3Fフリースペースにて持参のお弁当で昼食
- **午後**　地下1Fスーパーで買い物して帰宅

C子さん（50代女性）の過ごし方

- **午後**　3F市民活動支援センターで会議出席
- **午後**　1Fカフェでボランティア仲間と軽食・喫茶
- **午後**　地下1Fスーパーで買い物して帰宅

D輝くん（高校生・男性）の過ごし方

- **午前**　中学の友人と3Fフリースペースで自習学習
- **お昼**　地下1Fスーパーで昼食購入
- **午後**　塾の時間まで自習学習→塾→帰宅

来館者数の推移

平成19年12月の開館以来、元気21には年間約150万人の利用者が訪れています。

なかでも地下１階のスーパーの利用者が突出しており、地域住民のみならず、周辺の飲食店関係者や元気21の利用者が帰宅時に買い物する姿がよく見られます。また、３～５階の中央公民館の利用者数も年間を通じて多いほか、２階のプレイルームやこども図書館の利用も、開館以来、安定的に推移しています。

元気21のフロア構成と主要ターゲット層

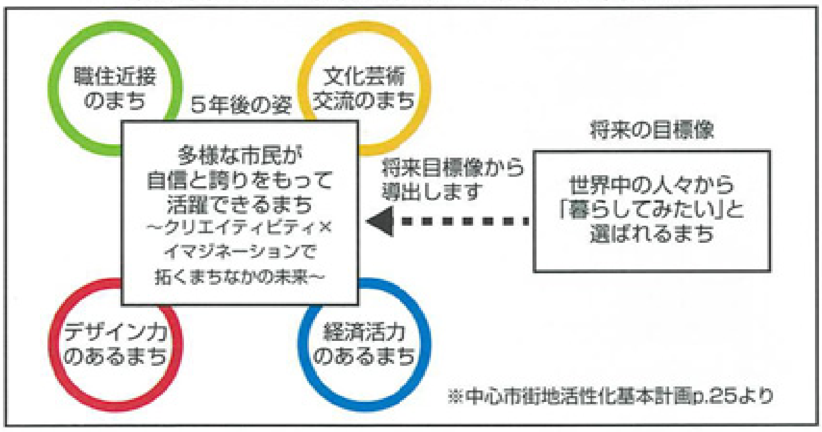
フロア	主要施設	主な利用者
6～7階	群馬医療福祉大学	大学生
3～5階	地域交流プラザ 中央公民館・市民活動支援センター	中高年世代 中学生・高校生
2階	こども交流プラザ こども図書館／子育てひろば	子育て世代
1階	市民交流プラザ ①屋内イベント広場／②喫茶店／ ③地域 FM 局／④行政窓口	①②中高年 ②③若年世代 ④多様な世代
B1～ B2階	生鮮食料品スーパー スーパー用駐車場（53台）	多様な世代

■ 今後のまちづくりに向けて

中心市街地活性化基本計画での位置づけ

本市は、中心市街地活性化基本計画（平成29年３月改訂）において、活性化の目標像として「多様な市民が自信と誇りをもって活躍できるまち～クリエイティビティ×イマジネーションで拓くまちなかの未来～」を掲げるとともに、目標達成に向けて４つの基本方針を定めています。元気21は、とりわけ「文化芸術交流のまち」の観点から施設運営を続けるとともに、年間150万人の来館者を、隣接するアーツ前橋の来館者（年間７万人）と併せて、まちなかへと送り出すための方策（回遊促進施策）を官民連携により進めることが重要であると考えています。

■中心市街地の目標像～将来の目標像と5年後の姿～



※中心市街地活性化基本計画p.25より

元気21利用者の回遊行動調査

元気21利用者の回遊行動は、本市の中心市街地活性化を進める上で、重要な要素です。

平成28年10月に、市にぎわい商業課が実施した「元気21利用者の回遊行動に関する簡易調査」によれば、元気21利用者のうち「同日中に中心市街地に出かけた（又は出かける予定）」と回答した割合は32.8%でした。男女別集計では女性の方が高い傾向があり、年齢別集計では高齢者の方が高いことが確認されました。また、来館先別集計では、中央公民館や市民活動支援センターへの来館者が回遊行動をとる傾向が高いのに対して、こども図書館や証明サービスコーナーの来館者は回遊行動に消極的であることが分かってきました。さらに、元気21の6～7階で学ぶ大学生では、外出比率は1/3に留まることも確認できました。これまでも経験的に、中高年層の女性がまちなかに回遊行動をとっている印象がありましたが、今回の調査はこれを裏付ける結果となりました。

こうしたことから、今後、性別や年齢、利用施設等を考慮しながら、元気21からの回遊促進施策をきめ細やかに講じることが重要であると考えられます。

今後の課題

この10年で、元気21の知名度は高まり、多くの市民にとって利用価値の高い施設になりつつあります。その意味で「多くの市民が集い、利用できる、新たな生活空間を備える複合施設」として整備された元気21は、当初の狙い通りの施設になっていると言えそうです。

しかしながら、他方で、元気21内の施設利用に留まり、まちなか全体へと来館者が十分に波及（回遊）していない点は、引き続き、課題として残ります。また、「多様な世代が行き交う施設」になっている側面もありますが、中央公民館やプレイルームといった個々の施設に関しては、必ずしも多世代交流を貫徹できているわけではありません。この点はプログラム運営の面の課題として、内容を充実させていく必要があります。

■ むすびに代えて

本市は現在、立地適正化計画の策定準備を進めており、より集約的な都市構造のあり方を模索する過程にいます。単に建築物を集めただけでは、必ずしも持続可能な都市になるとは言えません。元気21のような人々の文化的・芸術的活動を支える都市施設が適切に配置され、機能していることが、人々の交流をさらに促進し、都市経営に係る資源循環を円滑にするものと考えるものです。今後とも、元気21の適切な運営管理を通じて、本市のまちづくりをより豊かなものにしていきたいと考えております。